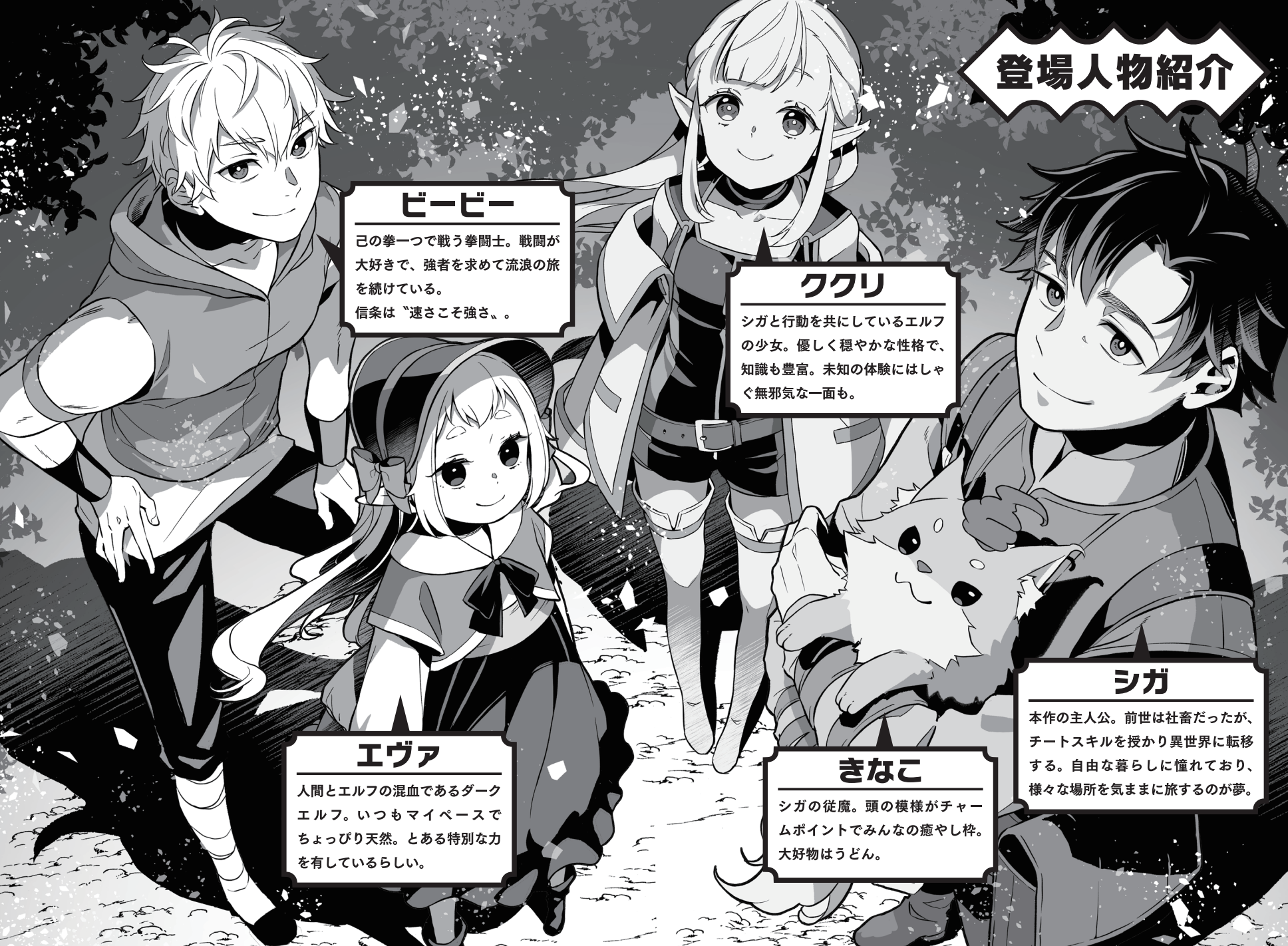
退屈な人生を歩んでいたおっさん、異世界に飛ばされる

taikutsu na jinsei wo ayundeita ossan, isekai ni tobasareru

AUTHOR 菊池快晴

illustration 岡谷


登場人物紹介
ビービー
己の拳一つで戦う拳闘士。戦闘が大好きで、強者を求めて流浪の旅を続けている。
信条は〝速さこそ強さ〟。
ククリ
シガと行動を共にしているエルフの少女。優しく穏やかな性格で、知識も豊富。未知の体験にはしゃぐ無邪気な一面も。
シガ
本作の主人公。前世は社畜だったが、チートスキルを授かり異世界に転移する。自由な暮らしに憧れており、様々な場所を気ままに旅するのが夢。
エヴァ
人間とエルフの混血であるダークエルフ。いつもマイペースでちょっぴり天然。とある特別な力を有しているらしい。
きなこ
シガの従魔。頭の模様がチャームポイントでみんなの癒やし枠。大好物はうどん。

序章　新たな人生

退屈な人生だった。

物心ついたころには、すでに家族はいなかった。

児童養護施設で育った私は、「人に迷惑をかけないことが大切だ」と教えられ、それを守るように生きてきた。

おかげで優しいと言われることは多かったように思える。

施設を卒業したらすぐに就職先を探した。誰かの役に立ちたかったからだ。

たどり着いた先は、いわゆるブラック企業と呼ばれるところだった。

給料は安く、なのに残業は長く。休みもほとんど取れなかったが、幸い贅沢は覚えてこなかったので、生活には困らなかった。

旅行番組が好きで、いつかは自分も行きたいと夢を持っていた。しかしそんな暇はいつまでたっても訪れず、気づけば自他ともに認めるおじさんになっていた。

中間管理職と呼ばれる職務についてからは、さらに苦労が絶えなかった。

上司からは責められ、部下には迷惑をかけることしかできない。

やがて自分ですべての仕事をこなすようになった。それが唯一、みんなが幸せになれる方法だっ

たからだ。
しかし長く続かなかった。過労がたたり、私の身体はついに限界を超えた。
心臓が強く鼓動し、強い痛みを感じ、世界から自分が消えていく。
意識を失う中、この世界に何かを残せなかったことよりも、自分を大切にできなかったことにやるせない気持ちを覚えた。もっと、やりたいことをすればよかった。自分のしたいことを。
痛みが消えていく。これで終わりかと思ったそのとき、声が聞こえてきた。
男性でも女性でも、老婆でも老人でもない、不思議な声色をしていた。
『キミウチシガ様、大変お疲れさまでした。良い人生を歩めましたでしょうか』
質問に答えられなかった。とても、良い人生だとは思えなかったからだ。
すると、こちらの意図を察したように言葉が続く。
『左様でしたか。しかしあなたはとても清らかな心をお持ちでした。どうでしょうか。あなたが望むのならば、新しい人生を歩むことができます』
新しい人生？　いったいそれは、どういうものでしょうか。
心の中で念じると、答えが返ってくる。
『第二の人生ということです。行き先は以前と同じ世界ではありません』
ありえないことだが、不思議と嘘だとは思えなかった。
それよりも強い思いがよぎる。自分を大切にする。今度こそそれができるかもしれない。
次の人生は後悔しないように生きたい。

『その願い、聞き入れましょう。ほんの少しですが、私の力を分け与えます』
なぜ、そこまでしてくれるのでしょうか。
『良い人には良い行いをほどこす。当たり前のことですよ』
嬉しかった。私の人生が無駄ではないと、肯定された気分になれた。
次の人生は自由に生きたい。何にも縛られず、気ままに行動したい。いつも、何かに縛られていたからだ。
『承知いたしました。あなた次第でこれからの人生は豊かなものとなるでしょう。私の力を分け与えます。新しい世界で幸あらんことを』
もしかしてあなたは神――……。

第一章　異世界へようこそ

目を覚ますと、私は湿った落ち葉の上で寝そべっていた。
上半身を起こす。どうやら雑木林の中にいるみたいだ。
風が頬を撫でる。爽やかな森の香りが鼻をくすぐる。
「……ここが新しい世界か」
不思議な感じだ。ただの森だが、なんだか空気が違う。いわゆる、異世界と呼ばれるところだろ

うか。

立ち上がると、身体が軽いことに気づく。

そういえば、力を分け与えてくれると言っていた。それのおかげだろうか。

恐怖はなく、自然と笑みがこぼれていた。前世の仕事の重圧から解放されたからだろう。

「次は、私の人生を歩む……だな」

明確な目的のない、けれどもしっかりとした意思を呟き、まずは自分の服装に目を向けた。

どうやら意識を失う前に着ていた作業着のようだ。上下ともに薄いグレーで、同じ色の安全靴。

お洒落とは言い難いが、幸い森の中を歩くには適している。

「よし」

当てもなく歩き出すと不思議な感覚に陥った。足が、誰かに支えられているように進む。何かが身体に宿っている。

これはなんだろうと思いつつ、小川を見つけて、まずは顔を洗った。喉を潤すことも考えたが、雑菌がないとは言い切れない。新しい人生でいきなりお陀仏は勘弁したい。

顔を洗うだけにとどめてから、改めて水面を見つめると、気づいたことがあった。

「少し……若返っているのか」

水面に反射した私の顔は、十歳ほど若返っていた。薄くなっていた黒髪は目にかかるくらいに伸びていて艶もある。心なしか、肌も綺麗だ。それでも三十代半ばのおじさんではあるが、少し嬉しかった。ありがとう、おそらく神よ。

「……ん、これは」
改めて顔を眺めていると、視界の右下にチカチカするマークを見つけた。
目をこすってみたが、どうもゴミではないようだ。
ふと前世の記憶が甦る。漫画で読んだあれに似ている気がする。
私は、おそるおそる『ステータスオープン』と呟いた。

『キミウチシガ』
レベル：1
体力：E
攻撃：E
魔力：E
ステータス：驚きびっくり興奮状態（温かいお茶を飲んだほうがいいかも）
装備品：作業現場ワーカー上下（やや安い）、安全靴（やや硬い）
固有能力：超成長、お買い物、自動言語翻訳
スキル：空間魔法Lv1

まるでゲームのような、視界に半透明のステータスが表示された。
人並みに漫画やアニメは好きだったが、現実になると驚きが勝ってしまう。

しかも、訳がわからない文言ばかり。
体力などはおそらく低いのだろうが、スキルは初めから覚えているものなのか？
試しに空間魔法と呟いてみる。
するとジジジという不協和音とともに、小さなブラックホールのようなものが目の前に出現した。
これは……なんだ？
「……手を入れるのは怖いな」
試しに落ちていた石ころを投げ入れると、ステータス画面の空間魔法の欄に新しい通知が出てきて、1／100と記載された。
もう一つ投げ入れると、2／100だ。体積か数量が計算されているのだろうか。
でも空間魔法というが、これは……中のものを取り出せるのか？
「……ええい、ままよ！」
さすがに自分が収納されることはないはず。そう思いブラックホールに手を入れてみると、石ころが手に当たった。そのまま引っ張ると、無事に石ころが取り出せる。
「これは……凄いぞ」
つい楽しくなって笑みがこぼれ、地面に落ちている石ころをポイポイ投げ入れる。
しかし、すぐに石を集めてももの凄く無意味なことに気づく。
とはいえ次だ。
「超成長！」

何も起こらない。つい笑顔で叫んだからか、恥ずかしくなってきた。
自動言語翻訳はそのままだろうか、とはいえ森の中で使えるようなところはない。
となると、次は――。
「お買い物」
そう叫ぶと。視界に映し出されたのは、随分と見覚えのある通販サイトの画面だった。
「これは……Ｎｙａｎｙａｓｏｎじゃないか」
前世にあったオリジナル製品を販売している大手ネットショッピングサイト。商品のどこかに必ず猫のマークが入っているのが特徴だ。小さなネジ一本から、なんと車まで買えてしまう。
仕事で忙しかった私は、もっぱらＮｙａｎｙａｓｏｎのお世話になっていた。
……まさか、買えるのか？
慣れた手つきで操作して、食品をカートに入れる。
しかし購入しようとすると、『お金が足りません』と表示された。今はお金など持っていないので当たり前といえば当たり前だが、どうすればいいのだろうか。
改めて画面を見ていると、お届け先の項目の欄がなく、代わりに自動販売機の取り出し口のようなものが表示されていた。
ここに何かを入れるというのか？　いや、まさか。
試しに石ころを投げ入れると、０円と表記された。そして入れた石が戻ってくることもない。
石を入れて、０円ということは、もしかして価値があるものならば……。

そう思い、周りを見渡していると、赤く光っている宝石のようなものを偶然見つけた。
願いを込めて投げ入れると、ルーレットのようなものが出現して、数字がぐるぐると回った。
『計算中、計算中。――８００円ニャーン！』
「おお!?」
期待に胸を膨らませ、食料品をクリック。
そこで私は、ニャンニャンおにぎり１５０円を四つ、ニャンウォーターボトル５００ml１００円を二本カートに移動させた。
ドキドキしながらクリックすると『お買い上げ、ありがとニャーン！』とアナウンスが脳内に響いた。
次の瞬間、目線の高さにブラックホールのようなものが出現し、そこからゆっくりとおにぎりと水が落ちてきた。二つとも猫のイラストが描かれている。
間違いない。これは、Ｎｙａｎｙａｓｏｎの製品だ。
ありえない出来事に驚きつつも、胃袋を満たすためにおにぎりを頬張る。
海苔がパリッと音を奏でる。白米も熱々で、まるで出来立てだ。具は鮭にしておいて正解だった。
「ああ……最高だ……私はこのおにぎりのために生きていたかもしれない」
懐かしい味が身体に染みわたっていく。
数分程度でおにぎりを食べ終えたあと、冷たい水をゴクゴクと飲み干した。
ただの水だが、五臓六腑に染みわたっていく……。

そこでようやく頭が冴えてくる。
このお買い物というスキルがあれば、価値のあるものを投げいれることで、異世界でもネットショッピングができるということだ。これは無限の可能性がある。
食べ物はもちろん、必要な物がすべて揃うだろう。
……ぐう。
私の胃袋はまだ足りないと主張していた。
まだわからないことばかり、でも私はこの世界を楽しめそうだ。
とりあえず、先ほど８００円になった赤い石を探しに出るとしよう。

◇　　◇　　◇

『お買い上げ、ありがとニャーン！』
上空から、ゆっくりと『ファイヤースターター』が落ちてきた。
ネイビー色をした大きな鉄の塊。重ね合わせ火花を散らして、火をつける道具だ。
縁には炎を扱う三毛猫のイラストが描かれている。うむ、可愛い。
「さて、これで火がつくといいんだが」
私が異世界に来てから三日が経過していた。
幸い、いや本当にありがたいことに赤い石をいくつか見つけることができた。

そのお金で食料はもちろん、寝床の確保をするべく、キャンプ用品を揃えた。
タイミングが良かったのか、キャンプ応援セールというものがあり、それほど高くない金額でテントや小物を購入できた。
焚火もしたかったのだが、肝心の着火剤がなく、購入しようにも『金額が足りませんニャア』とお預けを食らっていた。
三日間、この日を待ちわびていた。
このファイヤースターターがあれば、焚火ができるはずだ。
「意外に難しいな……」
カチカチと金属をこすり合わせても、なかなか着火しない。
数えるほどだがキャンプはしたことがある。だがそのときはバーナーを使っていた。
バーナーを購入することもできたが、今後を考え、より安価なこちらを選択したのだ。
何度か試しながら数十分、小さな火花が、やがて大きな火となり炎となっていく。
「よし、なんとかなったな」
今すぐに必要がなくなった『ファイヤースターター』は、空間魔法のブラックホールに放り投げる。
実に使い勝手がよく、質量と体積で数値が変わることもわかった。
他にも使えそうなものをいくつか入れていた。そのとき、アナウンスが流れる。
『空間魔法のレベルがあがりました。――２４／１２０』

おお、こういうのもあるのか。
ということは……ステータスオープン。

『キミウチシガ』
レベル：４
体力：Ｅ＋
攻撃：Ｅ
魔力：Ｅ
ステータス：やや快調、寂しがり。
装備品：作業現場ワーカー上下（やや安い）、安全靴（やや硬い）
固有能力：超成長、お買い物、自動言語翻訳
スキル：空間魔法Ｌｖ２、解析Ｌｖ１（ＮＥＷ）

気づけばレベルも上がっていた。
朝から晩まで石を探していたからだろうか……？
もしかして超成長のおかげかもしれない。
空間魔法を右手で操作すると、所持品が映し出された。
先日購入した釣り具セット、ナイフ、ファイヤースターター。

ひとまず生活は出来ているが、問題は赤い石を使い切ってしまったことだ。
近くの川には魚がいるのを確認したので、そこで食料を得るしかない。
釣り具セットを取り出して移動し、小川の岩に腰を掛けようとした瞬間、後方からなんとも言えない感覚が肌を刺した。
気配察知というスキルが発動した。それが、直感でわかった。
「ウゥウ……」
低い唸り声とともに姿を現したのは黒い狼だ。私を睨みつけ、明らかな敵意を感じる。
頭部の黒い角が、相手が異世界の存在であることを確実に証明していた。
――魔狼。
直後、心臓が鼓動し始める。こんなこともあるだろうとは考えていた。だが実際に目の当たりにすると違う。相手は私を殺そうとしているのだ。怖くないわけがない。
釣り竿を急いで手放すと、腰のサバイバルナイフに手をかけた。
構えは適当だが、戦うという意思を見せつけることで警戒するだろう。
だが私の期待とは裏腹に、魔狼は勢いよく飛び掛かってきた。
「ガゥゥウ！」
確実に仕留めにきているのか、私の首をめがけて大きな口を開けた。牙がギラリと光る。
咄嗟にナイフで受け止め、身体を翻して必死に振り払った。
魔狼は勢いよく小川に投げ飛ばされ、ゆっくり起き上がるも、誤って水を大量に飲んだのか、明

らかに身体が重そうだ。
これで幾分か有利になったのは間違いない。
再び仕掛けてきたものの、同じ手は食わない。
「舐めるなよ！」
あらかじめ突き出していたナイフの先端が、魔狼の身体に突き刺さると悲鳴が上がる。
私は勢いよく地面に魔狼を叩きつけ、押さえつける。
すぐに絶命はせず、返り血を浴びた状態で数分も魔狼を押さえつけた。
やがて浅い呼吸を繰り返したあと、魔狼は完全に息絶えた。
「はあはあ……――ッ！」
なんとも言えぬ感覚が全身を駆け巡る。これが、命を懸けた戦い。
だが次の瞬間、ハッと周りを見渡す。狼は群れで行動するものだ。
しかし、幸いなことに気配は感じられなかった。
『魔狼を討伐、超成長が発動し、ＥＸＰボーナスが入ります。レベルが７になりました。短剣Lv１を習得しました。並列思考Lv１を習得しました。冷静沈着Lv１を習得しました』
ステータスを確認してみると、数値が軒並み上昇していた。
まるでゲームのようだが、倒れ込んでいる魔狼は本物だ。
超成長は、やはり私が思っていたような、成長を助けてくれるスキルらしい。
「はあはあ……」

ようやく安堵し、後ろ向きに倒れ込んで、生を喜ぶ。
元の世界で感じていた退屈とはほど遠い。しかし、楽しくもあった。
時間の経過とともに頭が冴えていく。冷静沈着のおかげだろうか。
「……肉、か」
身体を起こして魔狼の死体を見つめる。
ここへきて三日目、私の脳も随分と野生味を帯びていたらしい。
魔狼を貴重な食糧だと思ったのだ。
だが解体なんてしたことはないし、知識もない。
ひとまずは空間魔法で収納するか。いや……もしかしたら。
『計算中、計算中。――８５０円ニャーン！』
……予想通りだった。
赤い石を投げ入れたときのように、魔狼を投げ入れてみたのだ。
つまり、価値のあるものと判断された。
金額にするとおにぎり５個分……命を懸けた値段にしては安いが、とにかくこれで胃袋を満たせる。
気づけばすでに暗く、テントを張っていた場所まで急いで戻り、外の椅子に腰を掛ける。
「今日は……いいよな」
おにぎりと合わせて、ホップが利いてそうな黄色の缶をカートに入れた。

やがて私の手元に落ちてきたのは、ビールだった。驚いたのは冷たいことだ。
これもサービスだろうか。
「ありがたい……」
思わず叫びそうになりながらも、ゆっくりとフタを開けていく。
プシュッと炭酸が抜けると同時に、アルコールの匂いが鼻孔をくすぐった。
私は酒が好きだ。おじさんだからではなく、大人の嗜みとして。
汗ばんだ身体が早くしろとせかしていた。慌てるなと言い聞かせ、ほんの少し缶を傾けながら口に触れさせる。だが、あまりの美味しさに一気に飲み干してしまった。
「……最高だ」
続いておにぎりをかきこんでいく。
勝つか負けるか、生きるか死ぬか、私はこの世界をまっとうに生きる。その決意を、魔狼とおにぎり、そして二杯目のビールに誓った。

◇　◇　◇

翌朝、ビールの空き缶とおにぎりの袋をＮｙａｎｙａｓｏｎに投げ入れた。
価値はないので０円表記だが、無限ゴミ箱にもなるのだ。いや、なんだかすまない。
気配察知のスキルは眠っていても発動しているらしく、一度だけ夜に目を覚ました。

いきなり起きてしまうのは面倒ではあるが、安全を確保しながらゆっくりできるのはありがたい。
まずは近くの小川まで移動し、顔を洗う。次に魚がいそうな場所で釣りを再開した。
積極的に魔物を狩っていくことも可能だが、それはそれとして釣りもしてみたかった。したいことをしたい、ただそれだけではある。
「のんびりもいいな……」
風が森を抜けると音を奏でる。野鳥の声が心地よい。
これぞ、二度目の人生に相応しい。
「……釣れないな」
ただそんな気分も三時間も釣れなければもたなかった。場所が悪いのかもしれないと移動を繰り返していると、昨日より小さな魔狼を見つけた。
恐怖より先に喉が動く。昨晩のビールが忘れられない。
冷静沈着のおかげだろうか、心が穏やかで喜びに満ちている。
ゆっくりと後ろから近づき、今度は不意打ちで首をかっ切った。
罪悪感はあるが、これも生きるためだ。
昨日と同じ要領で投げ入れると、金額は３５０円だった。
個体によって差があるのだろう。
レベルも上がった。これはなんとも言えぬ快感がある。

『キミウチシガ』
レベル：9
体力：C
攻撃：C
魔力：E
ステータス：やや興奮気味、寂しがり
装備品：作業現場ワーカー上下（やや安い）、安全靴（やや硬い）、サバイバルナイフ
スキル：空間魔法Lv2、冷静沈着Lv1、並列思考Lv1、解析Lv1、短剣Lv2（NEW）、気配察知Lv2、隠密Lv1
固有能力：超成長、お買い物、自動言語翻訳

短剣を使っていたからか、短剣術を習得していた。以前は力任せに振り回していただけだが、今では無駄のない動きができる。これは、とても便利だ。
気配察知も同じく、背中に目があるような感じだ。隠密に至っては足音がまったく出なくなった。
これは……本当に凄いことだ。
レベルがあるということは、今後さらに期待できるだろう。
しかしステータスの寂しがりはいつまでも消えない。
もちろんこれは、私が感じていることだが。

「……寂しい」
異世界に来てから誰とも会話をしていない。初めはステータスと異世界に興奮していたが、慣れてしまうと欲が出てくる。
ふと思い出す。施設で飼っていた犬のことを。
お世話をするのが好きで、よく散歩に行かせてもらっていた。
……懐かしいな。
『ピロロロン、ステータス寂しがりが基準値を超えました。精神状態を安定させるため、魔獣召喚を習得しました』
「まじゅうしょうか……ん？」
思わず呟くと、空間魔法のときのように次元がゆがみはじめた。
するとそこから、真っ白いナニカが見えてくる。内側はピンク色の――肉球!?
「がうがう！」
飛びついてきたのは、真っ白いもふもふの毛並みをした子犬だった。
悪意は感じられず、全力の愛を感じる。
「君は……君が……魔獣なのか？」
「がうっ！」
私の頬をペロペロして、嬉しそうに小さく吠えた。どこか懐かしい匂いがする。
包み込んでくれそうなふわふわの毛並みが頬に当たると、思わず笑みがこぼれた。

よく見ると、ステータスに追記されていた。
魔獣：フェンリル、と。
「子犬ではないのか」
宝石のような青い目をしている。額には赤い炎のような模様がついていた。確かに、普通の子犬とは随分違うみたいだ。
「がうがうっ」
「ははっ、くすぐったいぞ」
気づけばフェンリルを撫でていた。寂しい気持ちなんて吹き飛んで、笑みが止まらない。
ああ、なんということだ。私は、最高の相棒を召喚してしまった。
フェンリルは頭をこすりつけて、もっと撫でてと言わんばかりに、もふもふを押し付けてくる。
こいつめ、甘え上手だな。これではおじさんの心もきゅんきゅんだ。
しかしそのとき、フェンリルのお腹からぐぅ、と聞こえてきた。
私がこの世界に来たときも胃袋が空っぽだった。おそらくそうなのだろう。
「ちょっと待つんだぞ」
「がう！」
Ｎｙａｎｙａｓｏｎを操作してドッグフードを探していたら、フェンリルが私の右手をペロペロして、別の商品を購入してしまった。
『お買い上げ、ありがとニャーン！』

「……これは」
冷凍うどんを買ってしまった。アイスボックスはないし、食べきるしかないだろう。
問題は、残高をほぼ使い切ってしまったことだ。
「フェンリル」
「がう？」
「うどん、食べれるか……？」
言葉がわかるのか、全力で頷く。本当か……？
半信半疑でテントに戻ると、火にかけた小型の鍋でぐつぐつ。
うどんスープの素だけギリギリ買えた。器に移し替えると、冷ましてからフェンリルの前に置く。
「がう？」
「これはうどんだ。そうだな。見ていてくれ」
食べ方を伝えようと、勢いよく箸ですすった。するとフェンリルは、器用に両手をパンパンした。
え、拍手できるの？
「がうがう！」
「お、やってみるのか」
挑戦してみると言わんばかりに、フェンリルは器に顔を突っ込んだ。勢いよくすすり始める。
「がうー！　がうがう！」
どうやらお気に召したようで、すぐに食べきってしまった。ステータスに大満足と書かれていた。

どうやら、これで状態がわかるらしい。
「美味しかったか？」
「がう！」
最高だ、とのこと。とはいえ、まだ足りなかったらしく、もっとない？　と前足でちょんちょんされた。可愛い。
「悪いが今日はこれでおしまいだ。明日、なんとかしてあげるからな」
「がうう！」
フェンリルは大喜び。またもや、私の頬をペロペロとした。
テントには毛布があったが、フェンリルがそっと私の胸元にやってくる。
天然のもふもふは温かく、抱きしめるとフェンリルの目がうとうとし始めた。
「眠っていいぞ」
「がう……」
突然のことで驚いたが、最高の相棒がやってきた。
もちろん私のステータスから、寂しがりが消えていたことは言うまでもない。

◇　◇　◇

「やっぱり釣れないな……」

「がう……」
空腹だ。フェンリルは真っ白いふわふわの毛並みをゆらしながら小川を見つめている。私は、いじけた子供のように小川に石を投げ入れつつ、ようやく腰を上げた。
私に釣りのセンスはないらしく、釣果（ちょうか）はゼロ。となると、やるべきことは一つ。
「やるしか、ないか……」
ただのおじさんの私が、積極的に魔物を狩っていこうということだ。
恐怖はないが、不安はある。今までは突発的に戦っていたが、今度は自分から仕掛けに行く。
できれば殺したくはない。しかし今の私はある意味でパパだ。フェンリルという子供を育てる責務がある。
未婚なのは悲しいが、やるべきことをやる。
「任せておけ、フェンリル」
「がう！」
わかっているのか、わかっていないのか、いい返事だった。
というか、いつまでもフェンリルと呼ぶのは失礼な気がする。
人間！　と呼んでいるようなものだ。いや、ここで例えるなら犬！　で良かったか。
しかしいざ名付けるとなると悩んでしまう。フェンリルだからフェン？　それとも後ろを取ってリル。どちらも安易すぎるか。
ふわふわの真っ白い毛並み、できれば私の想いを込めたい。

……そうだ。
「フェンリル」
「がう？」
「今日から君の名前は……『きなこ』だ！」
実は私の好物はきなこ餅なのだ。しっとりモチモチしていて美味しい。フェンリルを見ていたら思い出してしまった。また、施設の犬にも『きなこ』と名付けていた。これでいいのかどうかはフェンリル次第だが――。
「がうー！　がうがう！」
「もしかして、気に入ってくれたのか？　――きなこ」
「がう！」
「きなこ！」
「がう！」
喜んでくれた。おじさんの名付けセンスが、認められたのだ！
あまりの嬉しさに抱き着いた。二人で喜びのダンスをしていたら、同時に胃袋が鳴った。
「狩りをするか、きなこ」
「がう」
頷いてくれた。ありがとう、きなこ。大好き、きなこ。

◇　◇　◇

ということで、私は釣り人から狩猟者になった。
サバイバルナイフを片手に森を歩きながら獲物を探す。気分はダンディおじさんだ。
後ろを振り返ると、きなこがふわふわ毛並みを揺らしながら追従してくれている。これではただの散歩おじさんだ。
そのとき、地面に足跡を見つける。
「これは……」
「がう」
きなこの足跡だった。同じ道を通っていた。
そうだ。私は狩猟の知識などない、ただのおじさんだ。
しかしそこで、きなこが鼻をくんくんさせた。まさかと思っていたら、突然走り出した。
慌てて追いかけると、とある場所で足を止める。
視線の先、そこには魔狼の群れがいた。よくやった、きなこ。
一匹ずつが理想だったが、そこまで上手くはいかない。
覚悟を決めて、以前と同じように背後からにじみよっていたら、突然風が吹いた。
風が背中側から前へ吹き抜け、魔狼が振り返る。

どうやらここは風上だったらしい。魔狼たちは獰猛（どうもう）な叫び声を上げると、凄（すさ）まじい速度で向かってきた。

その数は五体、等価交換だと３２５０円、おにぎりもたくさん買える。こんなときに冷静沈着はやめていただきたい。

「きなこ、下がっていてくれ」

覚悟を決めてサバイバルナイフを構えると、魔狼が突然足を止めた。

私の覇気（はき）が効いたのか？　ダンディおじさんの殺気か？　と思っていたら、私を囲むようにジリジリと前後左右に動いていく。

なるほど、彼らも本気ということか。

けれども私もこれまでに命のやり取りをしてわかったことがある。

それは先手必勝だということだ。

正面の魔狼に向かって走り出し、狙いを定めた。

しかし彼らも群れの行動に慣れているのだろう。私の動きを予測していたらしく、正面の魔狼が勢いよく退いた。同時に、左右から別の魔狼が襲いかかってきた。

実によくできた連携（れんけい）だ。しかしそこで不思議なことが起きた。

時間が、ゆっくりに見える。

魔狼の唸（うな）り声も、動きも、スローモーションのようだ。

何かが、いやスキルが手助けしてくれている。

私だけは普通に動く。まるで、自分だけが速いような世界だ。

攻撃をすべて回避できる。剣の達人の技術が宿っているみたいだ。

赤ん坊同然の私の身体に、細胞レベルで伝わってくる。

「すまないな。どうやら私は強いらしい」

襲いかかってきた魔狼を倒して一息ついていると、後ろからきなこの唸り声がした。振り返ると、魔狼の牙を軽やかに回避し、鋭い牙でカウンター攻撃を仕掛ける。そして息の根を止めた。

さすがフェンリル。可愛いだけじゃないということか。

「がう！」

「私の後ろは君に任せられるな」

『ピロピロリン、レベルが上がりました♪　新たなスキルを習得しました♪　レベル10を超えたので、ボーナススキルを取得、選択してください』

『キミウチシガ』
レベル：10
体力：C＋
攻撃：C＋
魔力：E
ステータス：心臓高鳴る、溢れる高揚感

装備品：作業現場ワーカー上下（やや安い）、安全靴（やや硬い）、サバイバルナイフ
スキル：空間魔法Lv2、解析Lv1、短剣Lv3、気配察知Lv2、隠密Lv1
格闘Lv1（NEW）、君内剣Lv1
固有能力：超成長、お買い物、自動言語翻訳、魔獣召喚、冷静沈着、能力解析

新しい画面だ。ボーナススキルを選んでくださいと、視界に映し出される。

①身体強化（弱）
②騎乗術（弱）
③自然治癒（弱）

これだけじゃ何もわからない……そうだ、能力解析を覚えたのか。
操作すると詳細が映し出されていく。

①身体強化（弱）：魔法耐性、防御耐性を向上させ、怪我をしにくくなる。
②騎乗術（弱）：生物、機械にかかわらず、基本的な操縦技術を身につける。
③自然治癒（弱）：自己の軽傷や軽い病気であれば、一日程度で回復できるようになる。

凄いな。どれも個性的だが、いざ習得しようとなると悩んでしまう。
①は魅力的だが、効果のほどが不明だ。②は今すぐに必要ないだろう。この世界に機械があるかどうかも甚だ疑問だ。
となると、③が安牌かもしれない。
軽い病気と言うのは気になるが、歯医者嫌いの私は虫歯がいくつかある。ぜひ習得しておきたい。
何よりも体力が回復しやすくなるだろう……決まりだな。
「③の自然治癒（弱）だ」
『了承しました。スキルが適用されます』
すると体が少し軽くなったような感覚に陥った。擦り傷だらけの身体が、ほわほわと温かみを感じる。
なるほど、これが自己治癒か。
10でボーナスということは、次は20だろうか。
楽しみ――いや、これではまるで戦闘狂だ。
私はあくまでも、のんびりと過ごしたい。
「がうがう」
そのとき、きなこが空に向かって吠えた。
見上げると、大きな蜘蛛の魔物が下りてくる。
強そうだが、やはり恐怖はない。それよりも――。

「ふむ、次はどんなスキルを習得できるかな？」
私は、人生で感じたことのない高揚感とともに、サバイバルナイフを構えた。
敵を倒してはお金にするのを繰り返していたら暗くなっていた。
一度だけ生きた魔物をＮｙａｎｙａｓｏｎに投げ入れてみたが、スルッと通り抜けてしまって何も起こらなかった。どうやらズルはできないらしい。
きなこは、実に優秀な相棒だった。索敵能力があるらしく、敵を嗅ぎ分けると吠えて教えてくれる。
もちろん、自分で戦うこともできる。
ステータスも軒並み上昇していたが、レベルが１５から上がらない。
ゲーム的にいうと、必要経験値が増えてきた、ということなのだろう。
しかしそんなことよりも待ちに待ったスキルを覚えた。
――魔法だ。
焚火で休憩していたときに火魔法を、顔を洗ったときに水魔法を、風になびかれたときに風魔法を、転んでしまったときに土魔法を覚えた。
最後は情けないが、とにかく覚えたのである。
スキル：空間魔法Lv2、解析Lv1、短剣Lv3、気配察知Lv2、隠密Lv1、格闘Lv1、君内剣Lv1

火魔法Lv1（ＮＥＷ）、水魔法Lv1、風魔法Lv1、土魔法Lv1、魔力糸Lv1
さらに固有魔法で魔力糸というのも習得した。
名前の通り、手のひらから魔力の糸を出せるようになったのだ。ゴムのように伸び縮みするし、裁縫ができそうな細い糸を出すこともできる。
これは色々と使い勝手がよさそうだ。
現在の貯金残高は９５００円。なんと、ビールをワンケース買えてしまう。
思わず微笑んでいたら、きなこの「がう！」で我に返る。
そうだ、私はパパなのだ。正しくは、未婚のパパだが。
安心していいぞ。ちゃんとパパがうどんも買うからな。

◇　◇　◇

食事の前に水浴びしていると、自身が魔物の返り血で染まっていることに気づく。
「……人の心は忘れないようにしないとな」
戦闘は楽しいが、道徳まで失くしたくはない。
「がうがう」
「ははっ、ありがとな」

どうやらきなこは、大丈夫だと言ってくれているみたいだ。まるで、私の心を見透かしているようだ。
そのとき、森の奥に微かな明かりが見えた。
目を凝らすと、それが人工的なものだとわかった。……あれは街か？　気づかないうちに随分と森を突き進んでいたのだろう。もちろんここで一生を過ごすつもりはない。
「きなこ、これからもついてきてくれるか？」
「がう！」
「よし、じゃあ今夜はゆっくりして早朝に出発しよう。最後に贅沢な晩餐をするぞ」
テントへ戻り、冷凍うどんにきつね揚げをのせて器に盛りつけると、きなこは青い目を輝かせた。
私はビール付きだ。それもロング缶。実は私のほうが高い。すまない、きなこ。
「きなこ、乾杯だ！　出会いに感謝を、そしてこれからの旅に」
「がうがうがう！」
ずっと考えていたことがある。Ｎｙａｎｙａｓｏｎで購入した商品を転売すれば、高く売れるのではないだろうかと。そうなれば、私はすぐに大金持ちだ。
淡い夢を抱きながら、きなこと夜更かしを楽しんだのち、ぎゅっと抱きしめて眠った。
「……がう」
「え、ちょっとお酒が臭うって？　眠れないの？」
「がうがう」

二回歯を磨いたが納得してくれなかった。三回目、認められた。
すまない、きなこ。大好き、きなこ。

第二章　オートリア国

「近くで見ると……凄いな」
早朝に出発し、きなことともに森を駆け抜けた。やがて見えてきたのは、街を囲っていると思われる外壁だ。道に迷うことがなかったのも、きなこが先導してくれたおかげだ。
門が見える位置で足を止めて目を凝らす。行商のような人たちや一般人、剣を持った兵士が中に入っていく。
見たところやはり異世界人のようだ。ただそれよりも自分の服装に目を向けると不安になった。作業着なので周囲とはかなり異なる。異端者おじさんと思われて大変なことにはなりたくない。
さすがに服が変なだけで捕まるようなことはないと思うが……。
勇気を出して歩き出そうとしたら、後ろからカポカポと馬の足音が聞こえてくる。
きなこを抱きかかえると、私の肩に乗ってきて、そこから頭の上で落ち着いた。
「がう」
どうやらここがいいらしい。ちょっと首が重いな。

近づいてきたら馬車だとわかった。ふくよかで穏やかそうな男性が操っている。
思えば初めての人との遭遇だ。かといってなんて声を掛けたらいいのかわからない。
いや、私には自動言語翻訳がある。
ならば――。
「すみません」
すれ違いざまに声を掛けると、男性は私に気づいて馬車を止めてくれた。
急いで駆けよる。まず頭の上のきなこを見て、それから私を見た。
「……襲われているのか？」
「え？　あ、いや……頭の上にいるのはきなこです」
「……きなこか」
静寂な時間が少し流れて、それから再び声を上げた。
「聞きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」
眉をひそめられたものの、なんだ？　と言ってくれた。ちゃんと言葉は通じている。
日本語を話しているだけだが、おそらくスキルが翻訳してくれているのだろう。
「あの国へ入るには、何か通行手形のようなものが必要なのでしょうか？　田舎から出てきて、何もわからないんです」
再び私の恰好をジロジロ見たあと、男性は笑みを浮かべた。
「確かにめずらしい服を着てるな。けど、どうやってここへ来た？　道中、お前のことは一度も見

かけなかったぞ」
「森を抜けてきました」
「森？　この森をか？」
「はい、何度か魔物に出くわしましたが、倒しつつ」
「ほう……腕はあるのか。となると、頭の上は魔獣か？　随分と可愛らしいが」
「はい。フェンリルです」
フェ……と言いかけて、男性は目をぱちくりさせた。そして、高笑いする。
「ははっ、田舎から出てきたわりには随分とおもしろい冗談じゃないか。確かにその青い目はフェンリルの特徴だが、ありえない」
「……ありえない……とは？」
「フェンリルは最強で、かつ幻の魔物だ。決して人に懐くこともなければ、姿を現すこともほとんどない。かの有名な勇者ご一行のお供だったとは聞いているが……ま、なんにせよ笑えたな」
え？　きなこが？　ふわふわ毛並みで可愛らしいきなこが？　昨晩ビールはダメ、歯を磨きなさいと私に言った（ような表情を浮かべた）きなこが？
……いやでも、魔力に敏感で戦闘能力も高い。それにきなこは生まれたばかりだ。そう考えると、確かに幼いわりには強すぎる……。
「それで入国したいのか？」
「え？　あ、そ、そうです」

「だがその恰好だと怪しまれるだろうな」
やはりそうか。事前に教えてもらって良かったが、問題が解決したわけじゃない。
一か八かで入国してもいいが、捕まったりしないだろうか。
「俺がなんとかしてやろうか」
その言葉にハッと顔を上げる。
「田舎の出と言うわりには言葉遣いも丁寧(ていねい)だ。育ちも悪くないとみた。事情があるんだろう」
私を品定めしたかのように見つめたあと、男は考えこんだ。
転生しましたとは言えない。すると男性は馬から降りてきた。
きなこは少し警戒したらしく、ほんの少しだけ魔力を高めた。
「俺の名前はビアード、商人だ。様々な国を渡り歩いている。で、お前に聞きたいことがある。何かめずらしいものを持ってるか？　それ次第で俺の付き人だと伝えよう」
「めずらしい物ですか？」
なるほど、商人だったのか。ということは、後ろは積み荷だろう。
空間魔法にＮｙａｎｙａｓｏｎ(ニャニャソン)の商品が入っているものの、人前で見せるのはマズイ気がする。
ゴソゴソとポケットを探るが何もない。
唯一身に着けていたものは、腰のサバイバルナイフだ。
いや、もしかしたら。
「……こちらはどうでしょうか？　傷つけることはしません、どうぞ手に取ってみてください」

逆手に持ってナイフを手渡すと、ビアードは驚いて声を上げた。
「かなり精巧な作りだな……耐久性も高そうだ。これはどこで？」
私は元の世界を思い出していた。
営業の仕事をしていたのだ。成績はそこまで悪くなかった。
相手に欲しいと思わせるにはいくつかコツがある。商品を買わせようとするのではなく、価値を提供するのだ。ビアードは商人だ。ならば、この意図が通じるはず。
「私の友人が作っていたものです。詳しくは話せませんが、入国できればほかの物もお見せすることができます」
「ほう……」
嘘も方便だが、商人なら食いつくはずだ。友人といえば、私だけが間を繋げられる、ということになる。商人が喉から手が出るほど欲しいものは商品ではなく、コネだ。
彼にとっても悪い話ではないだろう。
「どうやら頭も切れるようだな。ナイフは返そう。取らぬワイバーンの皮算用、俺の好きな言葉だ。国に着いたら色々と話を聞かせてくれ」
差し出された手、交渉成立ということだ。
偶然の出会いだったが、どうやら運も良くなっているらしい。
「キミウチシガです。よろしくお願いします」
「シガか、いい名前だ。きなこもよろしくな。なあに、ご主人には何もしないよ」

「がうっ」
きなこの発する魔力にも気づいていたらしい。どうやら、私が思っているよりも武力にも長けているようだ。
私は彼の馬車の後ろに乗り込むと、少年のように高鳴る鼓動を抑えながら、門をくぐった。

初めての街は、深く眠っていた私の童心を呼び起こしていた。
想像していた不安はどこへやら、高鳴る鼓動を抑えるので必死だ。
「凄い……すごいな」
ヨーロッパ風の街並みだが、細部がまったく違う。さらに大きく違うのは人種だ。
垂れ下がった犬耳、猫耳、かと思えば、普通の人もいる。本当に異世界に来たんだな。
「がうがう！」
「ははっ、きなこも楽しいか」
やがて馬車は路地の一角で止まった。古い煉瓦の建物だが大きくて立派だ。執事とメイドがすでに玄関前で待機している。
馬の手綱を握って、ビアードが降り立つ。
「ここが我が家だ。古い屋敷だが中は広いぞ。部屋もいくつかあるから都合がいいんだ」
「都合がいい？」
「見たらわかる。心配せず入りな。お前はあの妖魔の森を抜けてきたんだ。強さはわかってる。悪

さはしないさ」
妖魔の森……？　そういえば魔物が多かったが、魔物の多い森なのだろうか。詳しく聞こうとしたが、屋敷の中に入った途端、そんなことは頭から消えてしまった。
豪華絢爛とはこのことだ。高そうな赤い絨毯、壁にはいくつも絵画が飾られている。
天井にはシャンデリア、煌びやかに光る装飾、ハーブのような良い香りがした。
二階へ続く階段の手すりは光っていた。よく見ると、魔法陣のような模様が刻まれている。
西洋を思わせる作りだが、どこか異世界のようでもあり、それが私の好奇心をくすぐった。
ビアードはついてきてくれと言って、階段を上がっていく。
私は、きなこの足をタオルで拭かなくていいのかと不安を覚えたが、気にしないことにする。
上がった先には長い廊下が待っていた。同じ赤い絨毯が敷き詰められていて、まるでホテルだ。
左右には多すぎるぐらいの部屋があり、人の気配を感じる。
「ここだ」
突き当たりの部屋に入ると、応接間だとわかった。
大きなソファにテーブル、私たちはビアードの正面に座る。
きなこは高級そうなクッションを見つけて元気よく飛び乗った。私はひやひやしてビアードの顔色を窺った。どうやら問題ないらしい。きなこ、足はピンと上に向けていてくれ。
「はっ、めずらしいか？」
「かなり」

ここは物が多い。棚にはバカラのようなグラスがいくつも。
高そうな壺に、壁には魔法の杖が飾られていた。
もしかしてこれは飛べるのだろうか。欲しい、欲しいな。
商人といっても、古銭を扱うもの、骨董品を扱うものと様々だ。
だが彼はそのどれにも当てはまらないらしい。
サバイバルナイフを見たときの鋭い目は、気に入ったものを幅広く物を取り扱っている気がしていたが、その通りだったな。
――コンコンコン。
「失礼いたします。おかえりなさいませ」
丁寧な物言いで現れたのは、女性というよりは女の子だった。
十五、六くらいだろうか。銀色の長い髪の毛が特徴的だ。
驚いたのは耳だ。ピンと斜め上に伸びている。もしかしてエルフ……だろうか。目鼻立ちが整っていて、近くまで来ると宝石のような赤い目が輝いていた。
クッションでくつろいでいるきなこを見つけて、ほんの一瞬手が止まるも、すぐに私におしぼりのようなものを手渡してくれた。
「どうぞ、こちらを」
「ありがとう」
ここで働いているのだろうか。ビアードは特に気にせず話し始める。

「色々と聞きたいこともあるが、さっきのナイフをもう一度見せてもらっていいか？」
「もちろんです」
多少の不安はある。もしかして騙されているかもしれないと。
ただ一方で何が起きても対処できるだろうという謎の自信もあった。
魔物を倒し続けていたという成功体験が、私の性格を大胆にさせてくれているのかもしれない。
もちろん、きなこがいるのも安心感につながっているが。
ビアードは、しっかりと品定めをしたあと、ナイフを机に置いた。
「やはり良いものだな。それで、友人はほかにどんなものを作っているんだ？」
「色々です。めずらしいものばかりですが、品質は良いです」
「ははっ、曖昧で、それでいて強気だな。ククリ、飲み物を持ってきてくれ」
「かしこまりました」
ビアードは、先ほどのエルフの少女に声をかけた。ククリという名なのか。
使用人にしては幼い気もするが、この国での常識がまだわからない。
「一つ尋ねても？」
「何でも。丁寧な物言いは好きだが、あまり下手に出すぎると舐められることがある。俺たちは対等な立場だ。気を遣わないでくれ」
なるほど、それにしても本当に優しいな。
「……なら遠慮なく。あの子は使用人なのか？」

「そうだ。森で死にかけてたところを拾った。だが残念なことに買い手がつかない。エルフなのに魔法が使えないのが致命的だな」
「買い手？　――もしかして……彼女を売っているのか？」
「ああ、もしかして奴隷が非合法の田舎から来たのか？　そりゃ悪いな。ここでは合法だ」
今まで彼に好感を持っていたのだが、嘘のようにその熱が引いていく。
物だけではなく、人の売り買いもしているのか。
歴史をさかのぼると、奴隷は元の世界でもあった。それでも納得はできない。
森で死にかけていたという発言から考えるに、ビアードが助けたのだろうが、なんともいえない気持ちになった。
そして、先ほどの部屋は多いほうがいいからな、という言葉の意図に気づく。
「もしかして……この家の部屋には……他にも奴隷が……」
「勘違いするな。俺は三流奴隷商人じゃない。商品は大事にするし、クソみたいなヤツに売らない。実際、ククリは綺麗なもんだろ？」
彼の口調はぶっきらぼうだが、確かにククリの身なりは整えられていた。綺麗な肌をしているし、暴力の跡もない。それどころか、美しくすらある。
言葉遣いも丁寧だったところを見ると、教育もしっかりしているのかもしれない。
それでも、やはり私の感性では納得はできなかった。
「……魔法が使えないと買い手がつかないのか？」

「そりゃそうさ、奴隷ってのは基本的に戦闘要員だ。家で囲って愛でるなんざ、するのは一部の道楽者だけだ」
「ああ、そうか……」
元の世界と違って魔物がいる世界だ。奴隷といえばそうなるのも当たり前か。
ククリは再び現れて飲み物を渡してくれた。それから少し離れた場所の壁際で立ち、表情は一切崩さず、背筋を伸ばしている。心なしか、視線はきなこに向いているような気がする。
彼女からいただいた飲み物に手を伸ばして一息つくと、目が合ってニコリと微笑んでくれた。
心が痛くなる。可哀想、と思うのは私のエゴだろうか。
ビアードに頼んでククリを部屋から出してもらった。好奇心からくるものか、よくわからない感情のまま、彼女の値段を尋ねた。
「6万ペンスってところだ。魔法が使えなくても、あいつは容姿がいいからな」
「6万ペンス……例えば、このナイフはいくらになる？」
今気づいたが、私はこの世界の通貨のことをよく知らない。6万、それが高いのか安いのかもわからなかった。
「俺が買い取るなら――5000だな。ちなみに言っておくが、これはかなり良心的だぜ」
金額そのものより、ククリの値段がサバイバルナイフ十二本分だということに驚いた。
この世界の命は――間違いなく軽い。
「どうした、ククリが欲しいのか？」

「いや……」
自分でもよくわからなかった。初めての出来事に困惑してしまって、要領の得ない言葉を返してしまう。心の底から解放してあげたいのか、それともただ感情的になっているだけなのか。
それでも、この気持ちは嘘じゃない。
幸い、私には魔物を倒して得た９５００円がある。サバイバルナイフの値段は一本１８５０円だ。足りない分は魔物を倒せば数日で貯まるだろう。
少しの苦労で彼女を解放することができる、その事実が、私の心を揺れ動かせた。
「ちなみに言っておくが、ククリは近いうちに東のゴルドー国へ行く。勘違いさせたくないが、売るために嘘をついてるんじゃない。買い手がつきそうな富豪（ふごう）たちがいるんだ。さっきの言葉と真逆だが、あのあたりは荒っぽいヤツが多くてな。ほんとは売りたくないんだが」
「……売るためじゃないと前置きしておきながら、私の心を揺さぶってくるじゃないか」
ニヤリと笑う彼は、商売をわかっているようにも思えた。
人を買うのかどうかで悩んでいる自分にも嫌気がさしたが、この衝動は抑えられない。
「買おう。ただし、ナイフとの交換でお願いしたい」
「いいだろう。だが、そんなにナイフを持ってるのか？」
「用意する。だが数日だけ待ってくれないか？　連絡に時間がかかるんだ。そのかわり、色は付けさせてもらう」
交渉が決裂すればククリは私の目の前から消える。何の縁もないが、それは嫌だった。

「数日と言わずに数週間待とう。それに今日、ククリのやつを持って帰っていいぜ。足りない分は後払いでいい」
「……なぜだ？」
「俺は目利きに自信がある。商品も、人もな。お前が嘘を言ってないこともわかる。それにここで恩を売ったほうがいいこともな。けどまあ色は付けてくれよ」
やはり彼はそこまで悪いやつではないみたいだ。
私はお手洗いを貸してくれと言って、トイレでＮｙａｎｙａｓｏｎ（ニャニャソン）からサバイバルナイフを購入した。
再び戻るとククリがいた。すでによそ行きの服に着替えている。
ブラウンのシャツに、気品のあるスカートを穿（は）いている。
彼女は少し不安気に私の顔を見つめて「よろしくお願いします」と言った。
ククリに笑顔はなく、きなこは「がう」と挨拶した。
その後、奴隷の購入についての細かなルールなどをビアードと話し、正式にククリを買うことにした。
「シガ、それじゃあ金を待ってるぜ。他にも困ったことがあったら訪ねてこい」
「わかった。――じゃあ、行こうか。ククリ」
「は……はい」
なぜかわからないが、私は屋敷から逃げるような気持ちで外に出た。人を買ったという事実から

逃げたかったのかもしれない。
罪悪感を消すかのように、外に出て少し歩いたあと、近くのベンチに座った。
しかし彼女はずっと立ち尽くしていた。そうか、私の言葉を待っているのか。
「ククリ、隣に座ってくれ」
「はい」
「すまない。実は衝動的にしてしまったことで、君に何かさせるつもりはないんだ」
「衝動的、ですか……？」
「ああ、奴隷として……その、買ったんじゃない。君を解放しようとしたんだ」
「解放……私をですか？」
「そうだ。君は自由だ。どこへ行ってもいいし、何をしてもいい。お金がないなら、私が少し都合をつけよう」
どう考えても偽善行為だ。あの屋敷に部屋はいくつもあった。奴隷はククリ一人ではない。
けれども、後悔はない。
これから何度も奴隷を助けるつもりはないが、理屈ではなかった。
ククリを見たとき、前世で暮らしていた施設を思い出してしまった。自由がなく、居心地が悪く、したいことができなかった。まるで、昔の自分を見ているようだった。
しかしククリは表情を曇らせた。両手でスカートを握りしめて、目を伏せる。
「ありがたいことですが、私には行くところがありません。お金をいただいても、帰る場所がないんです」
その言葉でハッとなった。どうやら私の頭は平和な世界のままだったらしい。
解放さえすれば喜ぶと思っていた。でも違った。普通に考えたらわかるはずなのに。
衣食住にくわえて、これからは安全面も考慮しないといけない。考えようによっては、以前よりも危険な状態になったと猛省した。
「そうだな。その通りだな。私はバカだ……」
大きなため息を吐いて項垂れる。そこで、きなこがぴょんっと頭の上から飛び降りて、ククリの膝の上に乗った。
「がう！」
「……ええと」
「きなこだ。私も知り合って間もないが、いい子だよ」
フェンリルと言っても信じないだろう。これだけ伝えると、ククリは表情を和ませた。
きなこはククリを見つめて、それから頭をこすりつけた。
彼女は自然と頭を撫でる。きなこは嬉しかったのか、身体をもじもじさせて、私を見つめて、小さく吠えた。
このままじゃダメっ、と言っているようだった。
そうだな。責任は取らなければならない。少なくとも、彼女が安全に過ごせるまでは。
「ククリ、お腹は空いてるか？」

立ち読みサンプル
はここまで